

南遠地域の

医の近代化の起点としての玄聖講

舟木茂夫

はじめに

この度「地域の医史学」に静岡県に関するものと御依頼を受け、学術生疎の身を省みて随分と迷った末に、静岡県西部特に南遠江地域の医史を特徴付ける資料の紹介ということで受諾した。

原資料は本間達二医師（静岡市羽鳥八二九）が所有されており、B4サイズの和紙を袋綴にしたものに書き込まれた状態になっており、その内容については既に『静岡県医師会史』（昭和三十一年刊）、『静岡県の医史と医家伝』（昭和四八年刊）、『小笠医師会史』（昭和五十六年刊）などに記載がみられるわけであるが、その全容が中央で広く紹介されたことはなかった。

今回、玄聖講の創設に主役を演じた本間春城とその周辺の人物特に荻野元凱の門下生とあるいはその孫弟子たちの業績の一つとしてこれを評価すれば、講の創設は地域医療近代化の起点とみなすことが可能であるとの結論に達し、現在までの調査結果などを付記してここに紹介することにした。

「玄聖講盟書」の全容

玄聖講盟書並序

嘗有二三門客來語。語次謂余曰。吾儕業已心織匙耕。以免飢寒。無妻孥嗷々之訴者。雖伝法授術之所由乎。而亦先聖之余光相照乎昭代之恩輝也。為思万一之報。而猶未能冀其慮之。余深嘉其用心之篤。賞且諾焉。爾後。往々。詢諸友朋。友朋亦嘉庇焉。遂会同志幾人于一堂。相與議之。議曰。歲一開齋場。主薦蘋蘩。賓羞香泉。敬祭先聖。可乎。曰可。香泉之藉。屬之富人。以使息焉。可乎。曰不可。是賈豎之為也。曰不然。己羞之貧。誰敢取之。不取之物。戢之以為救濟之資。何不可之有。

夫医濟世之術。人之云病。豈唯疲癯疾也。有貧有俗。尚亦救哉。其或窮鄉子弟。乏師友者。取之學費。充之書糧。

不亦治俗病乎。其或罷災連害。急約廢業者。咨諏以振德之。不亦療貧病乎。古曰。居安思危。經曰。治末病。惟其有之。是乃先聖恤民之余。秦和匡國之意。所以參天地之化贊昭代恩也。豈不亦善乎。咸曰大善群議於是乎平定矣。

裁書不敬。盟以要焉。云。

賢是明盟

言不容偽

歲々克勳

禮祀之致

殫思研精

疆力于技

有能必伝

得効勿秘

莫誇功

莫趨利

莫違仁

莫失誼

若偷是盟

三皇二神

惟嫌惟忌

道術不凝

家声永陂

文化癸酉年十月念六日

懺虛齋源清行誠惺誠恐頓首拜書

朱印 朱印

拜葉神詞

大穴牟遲命少名毘古那命

二柱大神乃大前尔比某等恐美

恐美毛白久遠津神代尔二柱相並志

御心乎合也賜比御力乎合也賜弓諸共尔大

八洲国修理堅米賜弓国作坐大神

登称辞竟奉大神等語乃病乎

治流藥方乎毛始賜比定賜汚天下尔所

有顯見蒼生乃苦瀬尔落弓阿都迦比

惱乎助賜救賜倍比某等我鑿藥乃業

毛大神等乃米具美將賜御靈尔

依之過津事無驗波將有登広伎厚

恩頼乎恐美恐美喜奉宇礼志

備奉流登此某等恐美恐美毛白

文化十年癸酉十月穀日

中山外記 謹識

甲斐 松田惇篤夫 敬書

序

先聖閔生民不能無病、察物性之必愈之也。嘗百艸、試庶物、行經主治衆疾。及畏惡反忌之類、二神制療病之方、定禁厭之術、立極以胎後人也。聖神之慮深哉。遠矣、實是医家之大祖、有生

之父母也。誰不尊奉焉哉。因相互祭先神、以答無窺、恩頼之万

一。是乃所以定群議、結講社也云。

時 文化癸酉冬 矢野執庵 謹識

醫之為道也。非生而知之者必有師矣、師亦非生知之者必有書

矣、書之源也。出於先聖之口、經歷万年而不失其正、行于今之

世而為不易稱矣。豈有他哉。篤信而從古之法以療今之病、無有

不奏効者矣。所以醫之為医者者、可知而已而后潤屋潤身、足以

保妻孥矣。於是乎、知三皇二神之恩德莫大矣也。不可德以不謝

矣、不可恩以下報矣、因以至結一歲一日之会而敬祖神祭之也。

有余力則論道輔仁、受授法方而共欲救人民之患也。是則報恩之

万一其在於茲乎。

文化癸酉冬十二月

橘成章子文 謹識

朱印

朱印

議 定 訳

一、医学無怠惰出精可致事

一、不仁不善之行聊茂有之間敷事

一、医書互二可致貸借事

附・懦弱之義之樣心附卒業候は、早速可返却

一、応請候節奇症にて手を下しがたき病者有之旨其症回文二相

認可聞合異見事附各存付候治方有候は、書添可致順達

一、先医治療之善悪外人と不可話事

右譽誤り有之候ども必竟無益之事ニ候

一体病家へ参る節先懸り合之有無承届先医有之候は、為立
会処剂等之容子茂聞合可申答

一、病家立会其外應對之節相互ニ可正礼讓事

一、医師有之村方にて請診候は、其村之医師へ会積可有之事

一、病家之為を専要ニいたし少し茂差支無之様可取斗事

一、附病家にて不埒之応答も問々有之也ニ候得共重病にて心配
いたし候節杯は不行届の筋も可有之候間決て心ニ懸深切
を尽し諸事心添いたし可遣候併到て不法之義有之病人平癒
之後及懸合候は格別

一、両郡講外之医者対談致間敷事

但他方より来診之医も病家之心ニ任せ来談可致候得共住
所も不慥無頼之庸医と見請候は、決して應對不可致候、且
二郡之内へ外より越来る医生有之は修業之程相糺入講之上
一統会積可致術業未熟ニ候は、譽取持人之有如何様相頼候
共許容致間敷候

一、同社之内不幸大故ニ及候者有之は其社中より及沙汰組々賻
泉取集め年行司連名之書状を以早速訃音可致事

一、最寄を以社を結び正五九月致会合可奉祭祖神事

但其社中一統出席学術等講習可致候会所は順番ニ相動会
亭難致家は社中見斗用舎も可有之し其節賽泉二纏雜費料一
纏宛差出し候管取窺候上は出席無之輩茂講費は無滞可差出
候尤会亭ニても右料にて取斗外入用等無之様其組々にて便
利之定方も可有之

一、毎年十月十五日惣会合祭礼可相勤事

附当日会所は加茂村清水喜代大方ニ定置両郡一統出席と
取究候条兼て繰合せ置闕席致間敷候出席之上年中檢閲いた
し候書籍之中難解之文等詳く藥品等抄書持参異同を弁別し
精粗を研窮し怯弱を救ひ驕惰を規し衆評討論いたし候は、
各々一等之発明も可致候間無伏蔵可申出候且組々にて捧置
候老人前六纏宛年行司持参可差出候惣都合之上慥成方へ頂
ケ年老割之息を加へ置社中医業難取統者有之歟又は無扱入
用有之仁は物色之上相談を以見継遣或は当人捧置候分割返
し遣し候茂可依時宜候万一右賽錢預人無之節は一同可割返
事勿論也

当日祭礼之式

神供	鏡餅	価參百孔
御酒	二樽	同
御肴		同二百孔
菓子		同二百孔
料紙	百枚	

右幹事として一組宛定置祭入用は其組之費にて可相勤候但
し其社人数之多少ニより番廻り方は取斗も可有之候且当日
出会之人々一炊料五拾六ニ定置神前用物一同喜代太へ任置
候積り
右は此度有増之議定にて末々祖神之御廟をも興立医業之煉熟
をも相願一歳一度之集會取窮候上は猶又如何様之取定茂可相
成候間可然義追々可及評議候以上

横 田代 良有(黒印)
 所 久野 有盛(黒印)
 所 堂盤 綱太(黒印)
 所 吉川 柳菴
 所 大橋 良川(黒印)
 所 野村 随仙(黒印)
 所 野村 養樹(黒印)
 同 石井 玄仙(黒印)
 同 雨垂村 平松 杏順(黒印)
 大坂村 福住 良哲(黒印)
 新川村 相沢 玄徳(黒印)
 小貫村 溝口 玄同(黒印)
 平尾村 前田 玄隆
 稲荷部 滝川 玄理(黒印)
 加茂 渡辺 意三(黒印)
 所 白松 玄節(黒印)
 本所 小原 玄和(黒印)
 半濟 岡本重次郎(黒印)
 平川 本間 春城
 所 川田 文格(黒印)
 目木 外岡 雄伯(黒印)
 赤土 小原 雄碩(黒印)
 野 松下 良伯(黒印)
 同 上田 元策(黒印)

玄聖講再會議定之事

一、最寄を以順番ニ令会合奉祭祖神事

但賽銭者随懸捨ニいたし滝川姓へ相頼可申雜費ハ式百緡を

以為定尤会亭難致家者用捨可有之

一、礼之用和為貴にて社中互ニ相和し無伏藏研業可致事

門屋 中山 外記
 池新田 丸尾 良益(黒印)
 朝比奈 赤堀 本碩(黒印)
 比木 矢野 執菴(黒印)
 志留輪 滝 文菴(黒印)
 遠渡 嶋治 玄秀(黒印)
 同 山本 隆菴(黒印)
 地頭方 松浦 周益
 須々木 奥山 静順(黒印)
 相 寺田 桃仙(黒印)
 同 湯沢 春庭(黒印)
 同 益田 元養(黒印)
 菅谷 川田 東節(黒印)
 中西 中山 文仲(黒印)
 朝比奈 小野田導碩(黒印)
 金谷 殿木 修齡(黒印)
 同 木群 良迪
 菊川 戸塚 順伯

天保二年辛卯五月二十八日

於滝川氏会
出席人名

滝川	玄理	溝口	玄伯	相沢	玄徳	福任	良哲	平松	玄僊	白松	玄齡	中山	外記	丸尾	良益	赤堀	春碩	松下	良泰	小原	英齋	本間	春城	川田	寿格	渡辺	意三	白松	玄節	小原	松亭	岡本	重司	中山	春徳	福任	良哲	小原	英齋	本間	春城	溝口	玄伯
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

附記および参考文献

(一) 講元本間春城について

天明八年(一七八八)荻野元凱の下へ入門した際の記録に、明和七年(一七七〇)生名義生字清静とあり、また名清行字子果号僂虚齋と記載したのもある。医名は免毛、三代目の家督後は春城を襲名、隠退後は大安と称した。

本間一族で荻野家へ入門したものは、嗣子四代目春城をはじめ、掛川の義兄春伯とその家族である春育、中郎、春岱らの総計六名の多きに及んでいる。

東遠の国学の指導者栗田土満の門に入り、本居大平の門に入つて歌道にも励み、歌合わせて通しての文化活動や栗田土満の本間家での作品なども認められるが、掛川藩の教授に招聘された松崎廉堂は新築の三階の家屋によせて『山眺閣記』を著し、また一橋家から相良陣屋の代官に抜擢された小島蕉園は父親の二代目春城蔚山のご事と、本間家で古賀精里の揮毫になる七絶の軸について面談したことなどを記している。

天保八年(一八三七)没、墓誌には次のようにある。

考諱清行京子果学台洲荻先生業大文政庚辰退而自業有故障虚
来米津侯于京二条城又属到江戸後辞之僑居礪川五年以明和庚

名代 白松 玄齡

小原 松亭

名代 丸尾 良益

寅生天保丁酉年一月十日長逝寿六十有八歸於遺言曰頑然一物
化入宙宇快

辱愛孤本間春城源儼泣血誌

〔二〕周囲の人物をめぐって

三代目春城が記した序文の「二、三の門客」とある記載をめぐ
つては、本間家の門人即ち荻野元凱の孫弟子たちを指している^(一七)
一八、一九)という見方が支配的であるが、講の加盟者中には荻野元凱生存中の
三代目春城の同門者として、丸尾良益の他に川田文格の氏名も認
められる。

特に丸尾良益の場合は三代目春城と同道入門したとみられる他、
さらに寛政七年(一七九五)長崎へ遊学した後に栗田土満^(二〇)や本居
春庭^(二四)について国学も学び、三代目春城とともに地方歌会「門屋
会」に属していた形跡^(二五)もあり、二人の密着した行動をうかがうこ
とができる。

川田文格は川田家に伝わる覚書などから、京都でさらに吉益南
涯についても医学を学び、帰郷後痘科を主体に医を開いたものとみ
られ、文仲とも称しました隱堂と号した。

門客という記載が荻野元凱の孫弟子たちを指しているのか、或
いは荻野家での同門者をさしているのかという論議はともかくと
して、京都における蘭学の先駆と位置づけられている古方派、特
に漢蘭折衷派と目されるものについて、直接に医学を学んだか或い
は間接的にその流れを汲んだという場合にしても、彼らが講創設
の切掛けを作るとともに同志となって積極的に推進する立場に至
ったものとみることが可能である。

即ち、講の創設は荻野元凱一門の業績の一つとして評価するこ
とが可能で、只単に西洋化ということを以て近代化とみなすなら
ば、この地域においては彼らが主体となってこの講を創設した時
点を地域医療近代化の起点とみなすことが可能となろう。

〔三〕会場に関する記載から

会場に関する議定訳第一二条の記載から、文化十年(一八一三)十
月二十六日の設立総会をはじめ、以後引き続き天保二年(一八三
一)に規約の改訂が行われるまで、毎年十月十五日の定例総会は
旧加茂村(現・菊川町)の村役を勤めていた清水喜代太の屋敷で開
催されていたことになる。

ところで清水家に現存している古文書類については、昭和四十
八年(一九七三)に整理が行なわれた上、目録が作られていること
が判り、書留帳とか覚えなどの記載されている可能性があるもの
を選んで目を通させて頂いたが、残念ながら玄聖講に関する記載
を見出すことはできなかった。

従って、この年一回の医師たちの集りは、特に清水喜代太の気
を引くには至らなかったという見方が可能となるが、一方では果
たして規約通りに会が開催されていたかどうかという疑問も残さ
れている。

〔四〕規約の改訂について

天保二年(一八三三)に規約の改訂が行われたのは、講が振るわ
なくなつたためとする見方があるが、その辺の事情はともかくと
して、当時遠江の国学の指導者たちが盛んに開催していた学祖靈
祭にならう形で、規約の簡素化が行われたとみることも可能で、

即ち祖神の祭祀に重点を移すことで代理出席を可能にして、名目上の出席者を増やすことがはかられた結果と考えられなくもない。なお、規約の改訂を契機に、会場が旧加茂村の清水家から旧稲荷部村の滝川家へ移されている模様であるが、滝川氏とその御子孫に関する消息は未だつかめていない。

文 献

- (一) 京都府医師会編『京都の医学史』(資料編) 三〇四頁、思文閣、京都市、一九八〇(昭和五十五年)。
- (二) 大須賀鬼卯『東海道人物志』二二丁、三都書林、一八〇三(享和三年)、山崎鐵丸、掛川、一九三二(昭和七年)復刻。
- (三) 小笠医師会編『小笠医師会史』四二九頁、小笠医師会、掛川市、一九八一(昭和五十六年)。
- (四) 京都府医師会編『京都の医学史』(資料編) 三三一頁、思文閣、京都市、一九八〇(昭和五十五年)。
- (五) 同 右、三〇三頁。
- (六) 同 右、三一五頁。
- (七) 同 右、三一九頁。
- (八) 同 右、三三一頁。
- (九) 後藤一日「東遠国学の指導者栗田土満の功績とその門人・門流の足跡」『国学院雑誌』八四巻七号、三六頁、東京都、一九八三(昭和五十八年)。
- (一〇) 本居宣長著『本居宣長全集』(首巻) 四六頁、片野東四郎、名古屋、一九〇一(明治三十四年)。
- (一一) 尾沢狭束「四十五番歌合について」『土のいろ』六巻五号、一頁―二八頁、浜松、一九二九(昭和四年)。

- (三) 村松圭三「郷土歌人栗田土満・石川依平遺墨展について」『静岡県郷土研究』第一九輯、九九頁―一三九頁、静岡市、一九四三(昭和十八年)。
- (三) 松崎慷堂「山曉閣記」、松崎健五郎編『慷堂遺文』(上) 三九丁―四〇丁、元真社、東京、一九〇一(明治三十四年)。
- (四) 山本菜山『新訳・蕉園涉筆』二六頁―二七頁、小島蕉園顕彰会、相良町、一九五一(昭和二十六年)。
- (五) 同 右、四〇頁―四一頁。
- (六) 小笠医師会編『小笠医師会史』八四七頁、小笠医師会、川市、一九八一(昭和五十六年)。
- (七) 静岡県医師会編『静岡県医師会史』二頁、静岡県医師会、静岡市、一九五六(昭和三十一年)。
- (八) 土屋重朗『静岡県の医史と医家伝』五六頁、戸田書店、清水、一九七三(昭和四十八年)。
- (九) 静岡県医師会編『静岡県医師会二〇年史』七七〇頁、静岡県医師会、静岡市、一九七五(昭和五十年)。
- (一〇) 京都府医師会編『京都の医学史』(資料編) 三〇四頁、思文閣、京都市、一九八〇(昭和五十五年)。
- (一一) 同 右、三〇八頁。
- (一二) 小笠医師会編『小笠医師会史』四九七頁、小笠医師会、掛川市、一九八一(昭和五十六年)。
- (一三) 後藤一日「東遠国学の指導者栗田土満の功績とその門人・門流の足跡」『国学院雑誌』八四巻七号、三六頁、東京都、一九八三(昭和五十八年)。
- (一四) 本居宣長著『本居宣長全集』(首巻) 三三三頁、片野東四郎編、名古屋、一九〇一(明治三十四年)。

(五) 後藤一日「東遠国学の指導者栗田土満の功績とその門人・門流の足跡」『国学院雑誌』八四巻七号、四六頁、東京都、一九八三（昭和五十八年）。

(六) 舟木茂夫「小笠種痘誌」（前編）『小笠医師会誌・いwachどり』第一〇号、一一六頁—一一九頁、小笠医師会、掛川市、一九八二（昭和五十七年）。

(七) 佐藤昌介『洋学史の研究』五三頁、中央公論社、東京都、一九八〇（昭和五十五年）。

(八) 京都府医師会編『京都の医学史』（本文編）五〇五頁—五〇六頁、思文閣、京都市、一九八〇（昭和五十五年）。

(九) 舟木茂夫「加茂路散策」『小笠医師会誌・いwachどり』第一二号、八〇頁—八一頁、小笠医師会、掛川市、一九八四（昭和五十九年）。

(一〇) 静岡大学人文学部日本史研究会「旧加茂村・清水家文書目録」（未刊）静岡県立中央図書館蔵、一九三七（昭和四十八年）。

(一一) 土屋重朗『静岡県の医史と医家伝』七一頁、戸田書店、清水市、一九七三（昭和四十八年）。

(一二) 小山正『水野忠邦国学の師・高林方朗の研究』一六九頁—一七二頁、高林方朗顕彰会、浜松市、一九六三（昭和三十八年）。

(一三) 岩崎鐵志『内山真龍』二二三頁、天竜市役所、天竜市、一九八二（昭和五十七年）。

(一四) 舟木茂夫「近世の医師と国学」（遠江の場合）『静岡県医学懇話会・会誌』第一号、九頁—一〇頁、静岡県医師会、静岡市、一九八五（昭和六十年）。

(一五) 舟木茂夫「近世の医師と国学」（本間春城清行の場合）『小

笠医師会誌・いwachどり』第一三号、八三頁—八四頁、小笠医師会、掛川市、一九八五（昭和六十年）。

（掛川市・静岡県医史学懇話会会員）